

豆紙人形が語り掛ける

「物事に年は関係なし」



制作した豆紙人形を手のひらに乗せて
ほほ笑む生前のマサコ・ムトーさん
＝到津の森公園提供

ムトーさん遺作展

到津の森
公園で始まる

北九州市出身の紙人形作家、故マサコ・ムトーさん(本名・武藤正子)〔享年93〕の生誕100年を記念し、小倉北区の動物園「到津の森公園」で6日、国内外で好評価を受けた手のひらサイズの「豆紙人形」を展示した企画展が始まった。マサコさんが創作を始めたのは88歳の時。小さな作品からは「人生は何事も遅すぎること

はない」というメッセージが伝わってくる。展示しているのは、マサコさんが生涯で制作した約3000点のうち約90点、色鮮やかな千代紙や新聞の広告などを材料に、幼少期の記憶をたどった大正・昭和時代の風俗や東海道五十三次の宿場などを高さ3〜5センチの世界で表現している。

マサコさんは門司区(旧門司市)に生まれ、



企画展で展示されている豆紙人形

専門主婦として1男3女を育てた。69歳で夫を亡くし、翌年から夢だったパステル画を始めた。だが、すぐに緑内障で右目を失明。左目も白内障で視力が衰え、大腸がんなども発症したため、体への負担が少ない「豆紙人形」

の創作を始めた。「豆紙人形」は趣味として制作し、近所の子供たちに配っていたが、次女でエッセイストのヒロコ・ムトーさん(本名・相澤絃子)〔67〕の友人の画廊で展示すると好評を博し、04年にはパリでの展覧会を成功させた。

「かわいいねえ、おまえは。いい子だね。次はあなたを作る番だからね。ちょっと待ってね」。ヒロコさんには、マサコさんが「豆紙人形」たちに話しかけながら、楽しんで制作に励んでいたことをよく覚えていた。「普通のおばあちゃん

の素朴な作品が見る人に感動を与えるのは、一つ一つに魂が込められているからだと思

う」。企画展は6月16日まで。無料だが公園への入園料は必要。ヒロコさんは「いじめられている子やいじめている子、年を重ねた人たちに見てほしい。『何歳からでも人生は始まると伝わる』と話している。」【比嘉洋】